

屋外避難階段空間

～複数ビルでの屋外避難階段の共有による余白空間の活用～

今井 元 / Gen Imai

都市の余白空間の可能性を模索する

1. 背景

【都市の余白空間】

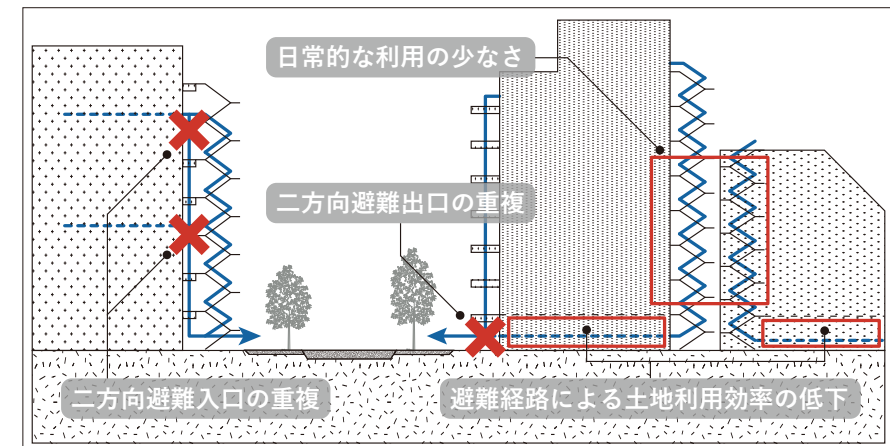
大量に建築が生まれる現代において、ファサードや街との接し方には多くの工夫がなされる一方で、建築と建築の間の空間（以下余白空間）は十分に活用がなされているとは言えない。しかし、余白空間はすべての建築に存在しながらも隣合う建築と接する唯一の空間でもあり、この空間を活用することは今後の都市及び建築を考える上で重要であると考えられる。本提案では都市の余白空間の可能性を模索することを大きな目的とする。



2. 対象・目的

【上下を繋ぐ余白空間：屋外避難階段】

『屋外避難階段』は高層化・密集化する都市において上下を繋ぐ可能性を秘めながらも、ビルの裏側に設けられることで日常的に利用されていない。また、地上部分での避難経路確保による土地利用効率の低下や二方向避難の重複など様々な問題を抱えており再考の必要がある。そんな残された余白空間である屋外避難階段に着目し、調査・分析を通して前述の問題解決を図りつつ、日常的に利用可能な屋外避難階段空間の提案を目的とする。



屋外避難階段が抱える問題

【建築と屋外避難階段の関係性と屋外階段空間に関する研究と分析】

No.18 PROTO Plus → ⑦共有

- ・ commonspaceとして機能
- ・ 土地・床利用率の向上
- ・ 二つの建築がつながり、実質的に空間が広がる
- ・ 様々な制限の緩和

床利用率の向上
comspaceとして

分析・ダイアグラム抽出例

研究と分析から、「①面ファサード」、「②ボリュームファサード」、「③日常動線」、「④回遊性」、「⑤中間領域」、「⑥平面断面変化」、「⑦共有」の7つの構成要素を抽出する。
また、これらの構成要素に共通する鉛直性や水平性などの屋外階段が持つ『方向性』に着目し設計提案へと応用することで日常的に利用可能な余白空間としての屋外避難階段を実現する。

①面的ファサード	②ボリュームファサード	③日常動線	④回遊性	⑤中間領域	⑥平面断面変化	⑦共有
面としてファサード構成 陰影と奥行きを与える	ボリュームでファサード アクセントと鉛直性強調	日常動線として利用	回遊しながら 緩やかに上層階へと誘導	採光や隣地との 緩衝空間として機能	形態として平面と断面に 変化を与える	床利用率の最大化 comspaceとして

屋外避難階段の活用につながる7つの構成要素

4. 対象地

【新宿区神楽坂：他都市のロールモデルとしての可能性を持つ街】

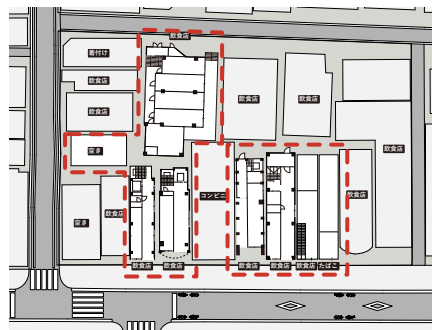
花柳界として栄えた歴史的な観光地としてのイメージが持たれる一方、商業地でありながら住民主体の街づくりが行われており観光・商業・生活が共存する他の都市のロールモデルとしての可能性も持つ。強い開発圧力に晒されるており、歴史ある街並みと防災上強固な都市の共存が課題となっている。18棟の中小ビルが建ち並ぶ三丁目目を対象街区とする。



敷地周辺上空図



用途：商業地域 / 建蔽率：80% / 容積率：500%
対象街区



対象街区既存図面

6. 設計

【スラブの積層により方向性が強調される屋外避難階段空間】

築年数や街区の避難経路、周辺建築との関係から手を加える建築群をAとBの2箇所選定し、配置ボリュームを決定する。建替えを行いながら屋外避難階段の配置と避難経路の一体化を行うことで既存街区の課題解決を図る。また、研究から得られた7つの構成要素と「方向性」をスラブの積層によって強調することで日常的に利用される屋外避難階段空間を構築していく。

配置決定 → 立体化 → 空間化

街区全体の避難経路から抽出

方向性を持たせつつ積層

屋外避難階段により繋がる

900mm：机上棚
3150mm：2階机
750mm：机
450mm：椅子
2400mm：2階床

150 mm ごとのスラブの積層によって水平性が強調

5. 提案

【複数ビルでの屋外避難階段の共有】

建物を建替えながら屋外避難階段を共有することで、街区を立体的に繋ぎ居場所となる屋外避難階段空間を提案する。同時に他都市のロールモデルとしての可能性を模索する。

中小ビルが密集する従来の街区

屋外避難階段を共有する新たな街区

床効率の低下

二方向避難の重複

完全な裏側

ビル間の繋がり

二つの表

複数方向避難

通り抜け

提案ダイアグラム

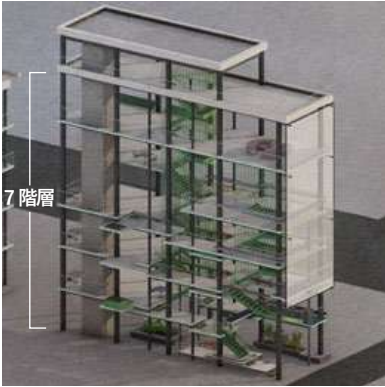


【屋外避難階段の共有によるビルの裏側の commonspace】

余白空間を活用することで commonspace としての屋外避難階段空間を構築しつつ、街区全体を更新していく。新たな屋外避難階段空間は街区のコアや居場所として日常的に利用されるだけでなく、隣接するビルにも影響を与え建築と余白空間の関係性を変化させる。

A. 北東側

【街の溜まり場】



7階層

対象：空き家1棟(70年代)
商業ビル2棟(80年代)
集合住宅1棟(80年代)
将来：6棟での共有が可能
現況：
・人通りの多い本多横丁に面する
・飲食店向けの配送ドライバーが走り回り歩行者と接触の危険性がある
・街中の緩衝空間の不足

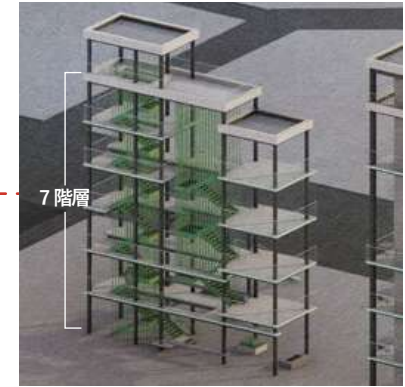


積層スラブと屋外避難階段が溜まり場となる



B. 南東側

【ビルの合間の中庭】



7階層

対象：商業ビル3棟(60年代以前)
商業ビル1棟(80年代)
将来：6棟での共有が可能
現況：
・周囲をビルに囲まれた空間
・特に芸者新道側の建築と大通りとの距離が離れており避難上の危険
・かつての路地の名残がビルの裏口として残っている



直行軸でのビル間の繋がりが生まれる



中庭としてビル利用者の居場所となる

【立体的に街区を繋ぐこれからの入会地として都市の余白空間が活用される】

余白空間である屋外避難階段が共有されることで、高層化するこれからの都市における新たな『立体入会地』としての姿を提示する。また、街区のコアが確保されることで安全な避難経路が生まれるだけでなく街区全体の建替えの敷居を下げ、新たな更新のサイクルを生む。

